

12月6日「イエスに躓く!？」マタイ 13:53~58

今日の聖書はびっくりするようなことを伝えます。「人々はイエスにつまずいた」え？イ
救い主イエスに躓く!？そんなことあるのでしょうか？それがあるらしい。かなり多くの
人がイエスに躓いたらしいのです。どうやって!？テストで難しい問題が出た時、理解に苦
しむとき、私たちは躓きます。それとは違いました。「54節 人々は驚いて言った。『この
人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。』」人々はイエスの教えの素
晴らしさに驚いたのです。イエスの起こされる奇跡に驚いたのです。それでもなお、人々は
イエスに躓いたと言います。なぜでしょうか？「この人は大工の息子ではないか!？」その
通りです!「母親はマリアで兄弟も皆知っているではないか!」それもその通り!「姉妹た
ちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか!？」全てその通りなのです!ナザレの人々に
とってイエスは「救い主イエス」ではなかった。近所の大工イエスだった。幼馴染イエスだ
った。そのことが人々を躓かせたのです。

当たり前すぎて分からない、ということが私たちにはたびたび起こります。一人暮らしを
始めてみて、初めて親のありがたみに気付いたり。地元を離れてみて初めて、そこにあった
色々な恵みに気付いたり。惰性や習慣になりすぎて分からないこと、気付けないこと、私た
ちにはたぶんにあります。ナザレの人々にとってイエスは当たり前存在すぎたというの
です。ですから、聖書はナザレの人々が特別不信仰だったと伝えたいわけではありません。
これは誰にでも起こり得ることなのです。私たちにとっても、聖書の様々な物語が、讚美歌
が、そして教会そのものがあまりに親しみすぎているため、おざなりになったり、感動がな
かったり、大切なメッセージを聞き逃しているということはないのでしょうか？本当に正直
に罪を告白しますと、私が礼拝説教を心から大切なものとして敬意をもって聴くようにな
ったのは、牧師になってからのように思います。牧師家庭で育った私にとって説教は「あの
父でも出来るもの」だったのです。

「躓き」について、今日の日課では、もう一か所、イザヤ書 59 章が選ばれていました。
そこにはこうあります。「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえない
のでもない。むしろお前たちの悪が／神とお前たちとの間を隔て／お前たちの罪が神の御
顔を隠させ／お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ。」イザヤ書 59 章は第 3 イザ
ヤと呼ばれるイザヤの弟子の語った言葉だと言われています。彼 or 彼女が語りかけたのは
半世紀にもおよぶ捕囚期間を終えて、バビロニアから帰国した人々に対してでした。長かつ
た捕囚が終わり、喜び勇んで帰った祖国は打ちひしがれていました。毎日、毎日、がれきを
片付け、異教徒からの嫌がらせに耐え、生活を再建することに追われていたからです。途方
もなく時間がかかると思われる日々でした。人々は親や祖父祖母から聞かされていたはず
です。「イスラエルはダビデ王という偉大な王が建てたんだよ。美しく装飾された神殿をソ
ロモン王が建てね、神さまが愛された国なんだよ、etc」人々は、がっかりしたと思います。
神殿があった場所はがれきに埋もれ、何十年も放置されています。自分たちの土地だと思っ

ていた場所には他の民族が入植させられていて、他の生活が営まれています。親や祖父母から聞かされていた栄光に輝くエルサレムなんて一つも残っていなかったのです。「こんなことならバビロニアに居た方がマシだった。」諦めて愚痴ばかりになる人たちもいました。「神さまの守りなんて嘘だ！」やけを起こして悪事に手を染め、他の神々を崇める者たちも出始めました。3～4節にはこうあります「お前たちの手は血で、指は悪によって汚れ／唇は偽りを語り、舌は悪事をつぶやく。正しい訴えをする者はなく／真実をもって弁護する者もない。むなしいことを頼みとし、偽って語り／労苦をはらみ、災いを産む。」

人々の心が失意と絶望に染まり、乱れ始めた時にイザヤの後を継ぐ預言者は現れ、語ったのです。「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。」捕囚からは約束通り解放されただろ！神さまの手は広く私たちを救ってくださる！主の耳が鈍いのではない。私たちの嘆きは神が必ず聞き届けてくださるはずだろう！「むしろお前たちの悪が／神とお前たちとの間を隔て／お前たちの罪が神の御顔を隠させ／お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ。」むしろ、私たち自身の中にある、諦め、失意、弱さ、その根源である「罪」が神さまとの間に壁を築き、隔てさせ、御言葉に躓かせ、神さまのもとに立ち返ることを拒んでいるのだと。「12節 御前に、わたしたちの背きの罪は重く／わたしたち自身の罪が不利な証言をする。背きの罪はわたしたちと共にあり／わたしたちは自分の咎を知っている。」御言葉が心に響かない現実、心がいつも飢え渴いている現実、満たされない現実、その原因が私たち自身の罪にあることを、実は私たちは気づいているのです。気付いていながら、気付かないふりをしている。すべて神さまのせいにして、自らが罪を負うことから逃げているのです。

今、女子少年院で講話を担当しています。彼女たちはとても良い子たちだと思わされます。でも時々、どこか自分たちのことを諦めている。「どうせ自分なんて・・・」本当に頻りに口にします。保護者や周囲の大人たちから、否定されたり、見捨てられた経験があり、価値がないと思いつこんでいるのです。教育学でも知られていることですが、褒められ続けた子と否定され続けた子では育ちが大きく異なることが知られています。特に、否定され続けると自信が持てなくなります。そして、倫理的規範や社会通念を守ることに意義が見いだせなくなります。正しくあろうとすることを諦めるようになります。そこで、子どもたちに語らなければならないことは罪は許されること。神さまはどんな人のことも愛しておられること。そして、あなたたちには本当に価値があるということです。

福音書に戻ってみたいと思います。イエスはナザレでは受け入れられることはありませんでした。なぜでしょう？彼らがイエスとあまりに慣れ親しんですぎたからです。でもそれだけなのでしょうか？イエスの時代のイスラエルの国もイザヤが語った時と状況はたいして変わりませんでした。捕囚から帰還し、やっとの思いで復興したイスラエルの国。小国ながらも何とか独立を保ち続けますが、ローマの将軍ポンペイウスによって制圧され、属州

とされてしまいました。2重にも3重にも税金は課せられ、生活は一行に楽になりません。皇帝を拜むのを拒んだことによって、帝国の中でのユダヤ人の立場は日に日に悪くなっていきます。抑圧に次ぐ、抑圧、人々の心は疲弊していたかもしれません。そんなイスラエルの片田舎のナザレの町。自分たちの中からそんな優れた者が出るはずがない。こんな酷い状況が覆るはずがない。そもそも神さまなんているのか？自分たち自身への諦めと失望が蔓延していたのではないのでしょうか。だからイエスの言葉も業も響かなかったのです。「どうせ自分たちの中から預言者も救い主も出るはずがない！信じることに価値などない！」自分たち自身への諦めと失望、これが私たちをイエスから遠ざけ、躓かせるのです。

私たち教会のなかにも同じ諦めが蔓延していないか？もう高齢だし、今さらな何か頑張っても変わるはずがない。後は慣れ親しんだ教会生活をつづけながら平安の時を過ごせばよい・・・牧師は差しさわりのない、優しい恵みっぽい御言葉を語ってくればそれでよい・・・本当にそれで良いのですか？諦めが、慣れが、私たちをイエスから遠ざけるのです。本当は今、聖霊は皆さんの耳元で叫んでいるのかもしれません！愛に生きろよ！主に仕えろよ！隣人と共に生きろよ！今まさに神は私たちに語りかけているのです。そして神さまは私たちのために救い主を送ってくださいます。贖い主を送ってくださいます。私たちの罪を贖ってさらに恵みをもたらす、大いなる救い主を送ってくださいます。「**20節 主は贖う者として、シオンに来られる。ヤコブのうちの罪を悔いる者のもとに来ると／主は言われる。**」

アドベントも2週目、私たちは神さまが私たちのために遣わされた救い主を待つ時を過ごしています。今年は慣れ親しんだ2000年続くクリスマスとは全く異なるクリスマスとなりそうです。コロナ禍による大混乱の中で迎えるクリスマスです。先が見えない、暗闇に覆われたような中で迎えるクリスマスです。いつものように大勢の人が集まれたね、良かったね、では済まないクリスマスです。だからこそ、私たちは神さまからの声を受け取れるかもしれません。今、神がこの状況を通して私たちに何を訴えておられるのか、真摯に聴き取りたいと思います。「イザヤ 60:1～2 **起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り／主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い／暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で／主の栄光があなたの上に現れる。**」